

放送大学「生涯学習支援番組」(2021年度第4回制作)の制作業務仕様書

1. 業務概要

放送大学学園(以下、「学園」という。)のテレビ番組(以下、「番組」という。)の構成・演出・収録・編集等の制作業務を行う。

本番組は、2021年度に放送予定のテレビ生涯学習支援番組である。

請負事業者は、学園が示す企画方針および計画に基づき、学園プロデューサー等と連絡・協議を行いつつ連携をとり、番組制作業務を遂行する。

2. 請負期間

別紙1のとおり

3. 制作する番組・本数・概算所要経費

別紙1~3のとおり

4. 番組制作業務の具体的内容、手順

1) 放送番組の演出

- ・出演講師、学園プロデューサー等と打合せによる内容原案を元に、演出方法及び内容を策定、実施

2) 内容検討・番組進行表の作成

- ・番組全体の構成案(項目、配列、時間、配分)策定
- ・映像・音声素材等の選定(ビデオ・写真・コメント等)
- ・出演者との内容・スケジュールの交渉(講師・ゲスト等)
- ・ロケーション先の下見、選定

3) ロケーション(国内)の実施と編集

- ・ロケーション(国内)に必要な要員の手配、機材の準備及びロケーションの実施
- ・出演者のヘアメイク及び衣装の手配
- ・ロケーション実施後の映像・音声の編集等、後処理
- ・広報用写真(著作権処理を要しないもの)の撮影及び素材納品

4) 番組の素材資料の収集と作成

- ・動画・静止画・図版等の収集および作成。なお、資料の収集にあたっては学園が推奨する素材(AFP)を優先的に選択する。

5) 請負事業者による「放送大学学園著作物利用規程」に基づく権利処理(音楽等一部を除く)処理にあたっては、以下の点に留意のこと。

- ・学園が定める承諾書を出演者から受領すること。また、受領した承諾書はコピーを保管の上、原本は放送部放送管理課へ提出すること。
- ・番組出演者にかかる出演料、交通費等は、請負事業者が負担すること。
- ・上記4)の素材資料の放送(マルチ編成含む)等利用に関わる著作権等の調査、確認及び権利処理、並びに処理に伴う費用は請負事業者が負担すること。
- ・放送(衛星、CATV等による同時再放送を含む)・インターネット配信(学園のHP上での公開。ただし、ダイジェスト動画においては、YouTube等外部HP上での公開にも対応のこと)
- ・学習センター等へのDVD配架等の番組の二次利用に関わる著作権等の調査、確認及び権利処理
- ・権利処理及び利用した素材(音楽及び上記3)等に伴う出演者並びに上記4)含む)等の記録

報告

- 6) 美術セットの調達と操作
 - ・大道具・小道具、生花木の調達及び操作
 - 7) タイトル、テロップ・パターンの制作等
 - ・タイトル、テロップ・パターンのデザイン及び制作
 - ・CG・アニメーションの作成及び操作

番組のダイジェスト動画の開始タイトル及び終了タイトルの表示方法は、別途学園プロデューサー等の指示に従うものとする。
 - 8) 番組の試写
 - ・学園プロデューサーによる完成前試写及び指示に応じた修正作業
 - 9) 放送用台本の作成、印刷
 - ・放送用台本の作成及び印刷
 - 10) 音響効果
 - ・番組に関わる選曲および効果音制作等
 - 11) スタジオ収録及び収録時の副調整室指揮
 - ・スタジオ収録に関わる各種伝票処理
 - ・出演者・技術スタッフとの収録打合せ
 - ・ドライ、カメラリハーサル
 - ・学園プロデューサー等の検査後、ディスク等引渡し
 - 12) 後処理、手直し等
 - ・資料の整理
 - ・伝票の整理
 - ・番組制作に使用した素材テープ等の入庫整理
 - ・納品後、番組の手直しについて、請負事業者の責めに帰すべき理由によるものは、請負代金に含むものとする。
 - 13) 上記各項目の業務遂行のために必要な打合せ参加
5. 番組制作業務に必要と想定される職種及び人数
- 請負事業者は、学園プロデューサーと協議のうえ、当該業務を適切に遂行できるよう各業務内容に応じ必要な専門知識を有する者を手配するものとする。
6. 学園施設・機器等
- 1) 収録は学園のテレビスタジオを使用する。収録に係わる業務に必要な技術要員は、学園で措置する。
 - 2) 完成素材収録用 XDCAM メディア、スタジオ収録用 XDCAM メディア、番組考査試写用 DVD-R、番組編成業務用 DVD-R は必要な数を貸与する。
 - 3) 請負事業者が手配・調達するものは以下の通り。
 - 収録時に必要な要員（技術要員を除く）
 - ロケ（要員および機材）
 - オフライン編集
 - 音響効果
 - スタジオ大道具・小道具、道具操作
 - メイク
 - 衣装(スタイリスト)
 - 4) 上記に含まれないものについては双方で協議して決定する。
7. 記録媒体等
- 学園が使用する記録媒体は XDCAM メディアであり、記録媒体の学園外への持ち出し及び学園への持ち込みについては、全て XDCAM メディアで対応すること。

8. 学園への納入物品の取扱い

次の完成物を番組の種別ごとに記載された数量を別紙 1 に示す請負期間完了日までに制作部へ納品し、学園職員による検査を受ける。なお、納入物品は学園技術フォーマット（別添の「テレビ制作技術基準」を参照）に準拠すること。

	生涯学習支援番組 (1 番組あたり)	告知用動画 (1 番組あたり)
放送用本番素材記録XDCAMメディア	1 本	1 本
クリーンピクチャー収録XDCAMメディア	1 本	1 本
番組考査試写用DVD-R	1 本	1 本
番組編成業務用DVD-R	1 本	—
放送用台本及び電子データ	1 部	1 部

9. 番組制作業務完了等の報告

請負事業者は、番組完成後「番組制作業務完了報告書」、「著作権処理業務完了報告書」及び「楽曲使用報告書」を放送部放送管理課に提出し、学園職員による検査を受ける。また、出演者から受領した承諾書も放送部放送管理課へ提出する。（「4. 番組制作業務の具体的内容、手順」の（5）を参照）。

10. 請負代金の請求・支払

請負事業者は、8 及び 9 の検査に合格したときは、請負代金を学園に請求する。
学園は、適法な請求書受理後、40 日以内に財務部経理課から支払うものとする。

11. 著作権の帰属等

- 1) 制作した番組に関する著作権（著作権法第 27 条及び第 28 条に規定する権利を含む。）は学園に帰属する。
- 2) 番組は、学園の著作名義で公表する。
なお、制作協力等の表示は、学園の基準によるものとする。
- 3) 学園は、番組等及び関連素材を必要により改変して使用することができる。
- 4) 上記各項目は、許諾を得た第三者の権利の帰属に影響を及ぼさない。

12. 業務内容の変更等

- 1) 本仕様書に規定する事項は、別の定めがある場合を除き、請負事業者の責任において履行するものとする。
- 2) 予期することができない状態の発生など、業務内容を変更せざるを得ない場合には、学園と請負事業者が協議の上で、業務内容を変更することができる。
- 3) 業務内容が変更された場合には、請負代金についても協議の上、変更することができる。

13. 安全の確保

- 1) 請負事業者は、業務の実施にあたり、請負事業者の従業員を直接指揮命令する者（以下、「現場責任者」という。）を必要に応じて 1 名以上選任し、任務に当たらせるものとする。

- 2) 現場責任者は、業務の実施の過程における安全対策について、請負事業者の従業員およびその指揮下にある全てのスタッフの安全確保に十分取り組むとともに、徹底を図る。

14 業務の再委託等

- 1) 請負事業者は、業務の実施にあたり、業務の全部について、一括して第三者に請負わせたり、一括して第三者に再委託してはならない。
- 2) 業務の一部を第三者に対して、請負わせたり、再委託する場合、請負事業者は、あらかじめ、所定の事項について、学園に申請した上で、承認を得なければならない。

テレビ制作技術基準

別添1-1

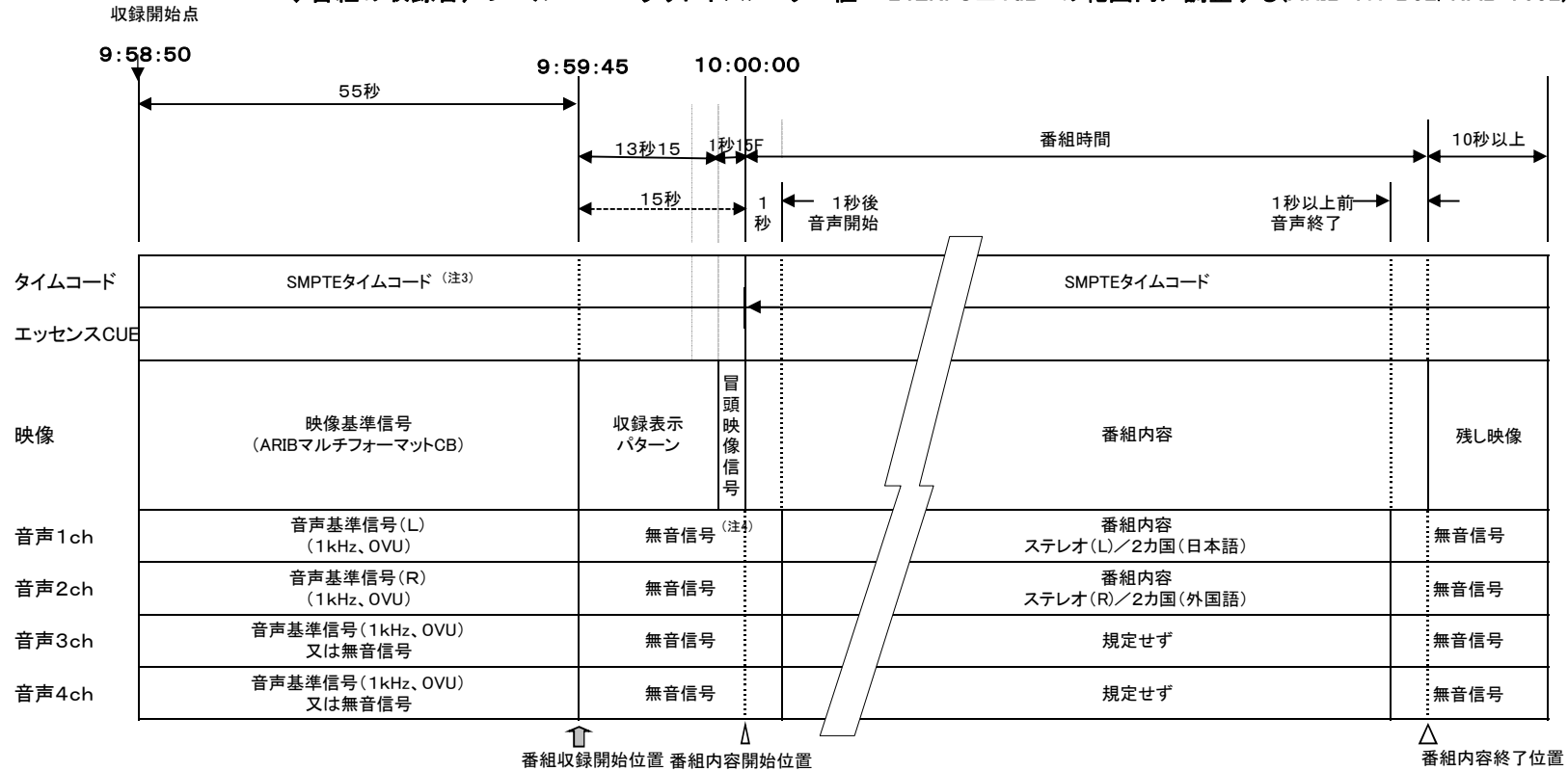
XDCAM-HDディスク放送用収録フォーマット

令和3年4月1日

◇映像:MPEG2 422P@50Mbps ◇音声:LPCM 48kHz 24bit 8ch ステレオ

◇MXFオペレーションパターン OP1a

◇番組の収録音声レベル ・ラウドネスメーター値 $-24\text{LKFS} \pm 1\text{dB}$ の範囲内に調整する(ARIB TR-B32/NAB T032)



* 予備SB(ステーションブレイク)は、1枚のディスクに複数本収録するが、それぞれが独立したファイルに1クリップで基準フォーマット収録する。

* 送出サーバー登録時、09:59:58:00からファイリングするため表示パターンを09:59:58:15まで記録する。

- 注1: ARIBマルチフォーマットカラーバーは「ARIB STD-B28」に準拠すること。
- 2: 音声基準信号は、OVU=基準量子化値(フルビットから20dB下がった値 -20dBFS)とする。
- 3: タイムコードトラックには、収録開始位置から連続したSMPTEタイムコードを記録すること。
- 4: 無音信号とは入力信号を絞ってきた(無音の)音声信号が記録された状態をいう。
- 5: 番組試写終了後、TDまたは担当者がラウドネスメーター値を番組収録連絡票に記入すること。
- 6: デジタル音声のプリエンファシスは使用しないこと。
- 7: ディスクごとに「ワンクリップ」収録とすること。
- 8: 末尾のフィラー音楽開始については、1秒以上音声の空白を挿入すること。

外部制作での完プロ制作における編集ソフトの考慮すべき項目

制作番組の完成品（完プロ番組）を放送大学学園に納入の際は、サーバ登録、送出、制作の観点から、下記の編集ソフトウェアを使用すること。

1. エディウス (GrassValley EDIUS)
2. プラナス (PRUNUS)
3. アビッドメディアコンポージャー (Avid Media Composer)

なお、上記以外の編集ソフトウェアを使用する場合は、必ず、XDCAM ディスクにベースバンド収録して完成品とすること。

以上によらない場合は、あらかじめ学園の承諾を得ること。

別紙 1

制作する番組・本数・概算所要経費・請負期間

1. 生涯学習支援番組 2番組

No.	分類	題目名	放送（ネット配信含む）期間	概算所要経費（税込）	請負期間
1	BS キャンパス ex 特集	現代的課題とレジリエンス（危機対応力）：人類の進化・拡散と多様性から考える (45分×2本)	2年	2,552 千円	契約締結日～ 令和3年12月28日
2	スペシャル講演	スペシャル講演 (45分×4本)	2年	6,908 千円	契約締結日～ 令和4年2月28日

2. 告知用動画 2番組（1分版×全放送回分6本）

内容	概算所要経費（税込）
放送やネット配信等で利用する1分間の告知用動画。	上記1に含む

※出演者は現時点の予定であり、変更の可能性がある。
出演予定者に内容等問い合わせを行うことは厳禁とする。

別紙 2

2021 年 3 月 25 日

生涯学習支援番組企画提案書

担当プロデューサー、ディレクター

大塚制作部長

1) 番組名(グループ名) BSキャンパスex特集	2) 個別番組タイトル 現代的課題とレジリエンス(危機対応力):人類の進化・拡散と多様性から考える
3) 関係の深いコース 人間と文化、自然と環境、生活と福祉	
4) 放送回数、期間、マルチ展開など 2年20回	5) 番組尺、本数 45分 × 2本(前・後篇)
6) 内容等 a. 目的・ねらい 人類の進化と拡散・文化多様性の観点から現代社会の諸課題とレジリエンスについて議論 本企画の目的は、COVID19 感染流行も踏まえ、地球環境問題をはじめとする人類の現代的課題を直視し、その要因・背景を「人類史的視点からのレジリエンス概念」を通じて考え・議論することである。本企画のねらいは、「グレートジャーニー(人類の移動・拡散の旅)」をキー・ワードとして、人類の進化・拡散と文化の多様性について理解し、その上で、レジリエンスの観点から、現代的課題と今後の社会について考えるための基盤を、わかりやすい形で提供することにある。そのためのキー・パーソンとして、山極壽一氏(京都大学前総長)と関野吉晴氏(医師・探検家、武蔵野美術大学名誉教授)のお二人をゲストとして迎え、企画者(文化人類学、博物館学)との鼎談を行う。山極壽一氏は、霊長類学(特にゴリラの生態・社会研究の世界的権威)・人類進化学の先端的研究者である。関野氏は、探検家として「関野吉晴のグレートジャーニー」(人類の移動拡散のルートを、逆に、南米大陸の南端から、自転車、カヌー、犬ぞり、トナカイそり、ラクダなど動力を使わずにたどり、10年近くかけてアフリカに到達)を成功させた世界的な実践者である。本企画では、研究と体験をベースとして、現代社会の課題について議論する。関野氏は医師でもあることから、現代的課題のなかで、感染症の流行についても触れる。学術的に重要な内容であるが、一般の視聴者にも興味をもって理解していただくと共に、授業への関心を喚起する。 放送大学の科目との関連性、及び既存の映像の活用 本企画は、『レジリエンスの諸相:人類史的視点からの挑戦(‘18)』(主任講師:奈良由美子・稲村哲也)で展開した「レジリエンス」に関する基本的な考えをベースとし、あらためて人類史的視点から現代的課題を議論するものである。山極氏は、『レジリエンスの諸相』第2回に出演し、ヒトが霊長類(類人猿との共通祖先)から引き継いだ特性と、類人猿とは異なるヒトの特異性を踏まえ、人類進化におけるヒトのレジリエンスについて論じた(放送大学OCWで常時視聴可)。その際、アフリカ現地のゴリラの生態に関する貴重な学術的映像(参考:Youtube映像 https://www.youtube.com/watch?v=Q-xkzKa_-uk)を提供していただいた。関野氏は、『博物館展示論(16)』第5回に出演し、国立科学博物館で開催した「グレートジャーニー」展について解説する共に、その展示会のコンセプトであった「地球環境の危機」などの現代の課題について論じた。その際、グレートジャーニーの(各地の多様な民族の生活を含む)貴重な現地映像(参考:Youtubeの映像 https://www.youtube.com/watch?v=Av5_TqgR2uE)を提供していただいた。	

学術性・公益性・経済性など

本企画は、山極壽一氏（日本学術会議前会長、4月1日より総合地球環境学研究所所長）の出演により、優れた学術性と公益性をもつ。また、世界的な実践者である関野吉晴氏の参加により、視聴者の感動と共感を得ることができる。さらに、海外ロケ等が困難な現状において、貴重な現地映像の活用は大きな意義があり、映像の無償提供により、費用対効果は極めて高い。ゲスト両名は、卓越した学術的知見だけでなく、知名度も高いため、キャンパス ex の知名度・視聴率の向上にも資する。

b. 内容・構成

約700万年前に類人猿との共通祖先から分かれた人類の最大の特徴は直立二足歩行であった。肉食動物による捕食の対象であった初期人類は、多産の方向に進化してきた。人類が生き延びるために獲得した、他の種に対して優越する特徴（レジリエンス）の最大のもは「共感能力」、「コミュニケーション能力」の発達である。それは、自由になった手で食物を運び分配することが契機となり、また、脳容積を増し頭でっかちになる一方で未成熟の子を産み（直立による骨盤の形状も関係する）、乳幼児を協働して保育する必要性によって発達したと考えられている。人類は、集団としての力を発揮して他の動物種を凌駕しつつ、地球上で移動・拡散し、各地で多様な文化的適応を果たしてきた。約1万年前からは、農耕・牧畜（食料生産）を開始し、急激に人口を増やし、いわゆる古代文明を成立させ、産業革命をへて現代の近代的社会を築いてきた。一方で、動物の家畜化、人口の急増と定住化、古代文明の発達は、感染症のリスクを増大させた。また、争いの要因を生み出した。こうして、人類の歴史は、文化的な適応と革新によるリスクの克服（レジリエンスの強化）と、新たなリスクの再生産の過程を経てきた。

本企画では、霊長類と人類の比較、人類の進化と移動・拡散、多様な人類の文化と社会についての知見、また、新型コロナ・パンデミックを含む現代社会の諸課題、私たちの生き方についての考えについて、担当教員（文化人類学、牧畜文化を専門とする）が進行役を務めながら、担当教員が制作した『レジリエンスの諸相：人類史的視点からの挑戦』のコンセプトを踏まえる形で、議論を積極的に主導してゆく。

ゲスト両氏は、異なる方法で人類の進化・拡散とその未来について研究し、考察を続けてきた。関野氏は、人類のルーツを考えながら、広い世界を自分の目で見て、歩き、滞在して、体験するという方法をとってきた。「グレートジャーニー」では、10年間に、40数回のエクスペディションを重ね、多くの失敗も経験しながら、世界で誰もできなかった（おそらく、これからもできない）ことをやり遂げた。同氏は、長期に滞在した南米アマゾンの「ヤノマミ」などの先住民社会での生活実践の体験を基に、「争いと共生」等の観点から、現代社会の様々な課題に関し、私たちの生き方に関する発信を続けてきた。

山極氏は「人とは何か」を探求するために、ヒトがそのルーツを共有するゴリラの社会に滞在し、観察を続けてきた。同氏は、自身をさらし続けることで、ボス・ゴリラを中心とする群に受け入れられ、彼らの行動をつぶさに観察してきた。それによって、ゴリラの疑似的な「家族」と父ゴリラによる子育て、食の分配の萌芽など、多くの画期的な研究をなしとげた。同氏は、京大総長、日本学術会議会長などの要職を務めるなかで、人類進化の観点から、ホモ・サピエンスの特質、人間社会のあり方、現代社会の課題、今後の展望等について発信をしてきた。総合地球環境学研究所の所長としての山極氏の考え方をすることは、「人新世」に生きる私たちの社会について考えるうえで重要である。

本企画では、一般の方々の興味を喚起するため、また両名の考えをより良く理解するため、実体験についても大いに語っていただく。具体的には、以下の構成と内容で議論を進める。

1) 前篇 現代的課題とレジリエンス(危機対応力):人類の進化・拡散と多様性から考える①実践

現地映像と共に自身の研究と体験について話題提供をしていただきながら議論を進める。

●話題提供の例

①研究・探検への道、現地での経験など

山極

・1960年代後半、日本の社会の価値観が揺さぶられていた。学生と機動隊がしょっちゅう衝突を繰り返していた騒乱の東京から離れようと思い京都大学理学部に入学し、物理学を学ぼうとした。

・コンゴの熱帯雨林で42頭のゴリラの群を追った。人付けの前の段階で、警戒した巨大なオスがドラミング(胸を叩く)をし、立ちはだかった。怖かったがにらみつけた。そうした対面を繰り返したある時、そのオスが突進してきて体当たりしたが一気に走り去った。それからは群れが徐々に受け入れるようになった。それからは、朝から晩まで彼らと生活をともにできるようになった。

関野

・子ども時代、街がどんどん開発された自然が消えていった。そんな開発に違和感を抱いていた。開発に逆行するように、自然の一部となって生きている人たちと自分は何だけ違うのか。自分たちとは真逆の生き方をしている人たちに会えば、いままでと異なる自分を発見できるかもしれない。そう思って、一橋大学に入学すると同時に探検部を立ち上げ、第一歩をアマゾンで踏み出した。

・旅をしていると、目から鱗が落ちるような体験をする。自分が常識だと思っていたことが、思い込みだったと気づかされる。そうした体験からの直観でいえば、われわれの祖先である霊長類を知ることも、目から鱗が落ちるような気づきがたくさんあるように思う。

②「争い」

山極：ゴリラは長い間、誤解されてきた。身体も大きいし、大声を上げてドラミングをするから、好戦的な動物と思われていたが、そうではない。ゴリラにとって、ドラミングは自己主張、興味や興奮を相手に伝えあう儀式化された会話の手段、人間にのっての言葉に相当する信号である。争いの気配を察すると、メスや子どもがさりげなく入ったり、体を触って仲裁をしたりなだめたりする。

関野：50年以上前に「戦争の研究」のシンポジウムがあった。多くの研究者が出した、戦争の原因の答えが「土地」だった。そのとき、「私の研究対象の人々は土地を争うことではない」と反論したのは、アマゾン先住民のヤノマミを研究する文化人類学者ナポレオン・シャグノンだった。ヤノマミは自分の尊厳を守るために戦う。女性を奪われたら相手を許さない。しかし、争いには作法があって、全面戦争にはならない。

山極：狩猟が争いの起源という説があったが、それは間違いだということが明らかになった。狩猟採集民は戦争をめったにしなかった。狩猟採集の暮らしから農耕への移行(食料生産革命)、そして定住化は、争いが激化する要因になった。時代が進んで産業が起き、貧富の差が生まれる。やがて職業軍人が現れて傭兵となり、財産をもつ人に雇われるようになる。こうして戦争を行う仕組みが生まれてくる。それは、人類の進化の長い歴史を振り返れば、非常に新しい時代の話だ。

2) 後編 現代的課題とレジリエンス(危機対応力):人類の進化・拡散と多様性から考える②議論と展望

ヒトの特徴、人類史をふまえ、人類史的観点から見たヒトのレジリエンスの観点から、現代社会の課題(感

染症、地球環境問題、グローバル化、情報化社会など) について、テーマを設定し、議論を進める。

●議論の基本的なコンセプトの例：

①「共感能力」：ヒトは「共感能力」によってレジリエンスを高め、他の動物種を凌駕し、移動・拡散し、地球上のほとんどの地域に適応し、食料生産によって人口を増やしてきた。さらに、ヒトの進化と集団の大規模化に伴い、ユヴァル・ノア・ハラリが言う「虚構を認識して共有する能力」が発達した。この「虚構」の可視化として巨大モニュメントが建てられ、信仰・ナショナリズム・イデオロギーなどの「ストーリー」が形成され、ヒトは国家につながる大集団を形成することができるようになった。その結果、「コミュニケーションの発達」「利他的行動」により人間集団のレジリエンスをさらに高め、ヒトは「地球の覇者」となった。しかし一方で、それが集団間では争いを拡大し、今日に至るまで、それを制御する仕組みは作られていない。

②「食料生産革命」：人類は4回の食料革命があった。最初は直立二足歩行で、自由になった手で食料を仲間に運ぶようになった。「肉食」が第二の革命で、過大なエネルギー源の確保により、脳を大きくする可能性を広げた。第三は火の使用と調理で、それによって消化効率が上がり、内蔵が小さくなり、咀嚼を軽減させ、時間が節約できるようになった。第四が農耕牧畜による「食料生産革命」、これで飛躍的に人口が増大し、生活レベルが上がり、複雑な社会を作れるようになった。しかし、現代に通じる多くの問題を作り出すきっかけにもなった。

③「プラネタリー・バウンダリ」：「欲望充足装置」となった近代文明は、深刻な地球環境問題を引き起こし、地球の様々な分野において臨界点をすでに超えたと言われている。産業革命以後、人類は経済の成長を最優先に考え、新たなエネルギーを次々と創り出してきた。それが過度の開発による自然破壊や国際競争、南北問題に代表される経済格差を生み出した。コロナ禍において人類の連帯が不可欠となったが、国際間の競争を優先する流れは今も変わっていない。

●具体的なテーマの例

①家族、食料

関野：人間は二本足で立つことで、機敏性を犠牲にしてきた。鋭い牙も爪もない。走るのも遅い。もともと人間はとてもひ弱だった。しかし、家族を作り、集団で生活することで外的から防御する力を高めてきた。そこが人類史のエポックメイキングだったと思う。

山極：ヒトは、両手が自由になって、食物を運んでこれるようになって、「食物の共有」、「共同保育」をするようになった。人類のあらゆる生活が「家族」や「集団」とともにある。ここが人間としての出発点である。家族と集団とともにあるという心—これを「共感力」と呼べる。高い共感力をはぐくんでいなければ、類人猿から人間にはなれなかった。ただし、共感力は、必ずしもプラスの側面だけではない。非常に高い共感力が、集団間では争いを生んで戦争をも引き起こす。

②「グローバル化」

山極：技術の進歩やIT化の進展に伴って新しい機械やシステムが次々と生み出され、世代や集団にかかわりなく、広く一斉に投げ出された。それがグローバル化である。それによって教育も変わった。上の世代に教えてもらうことがなくなり、新しいことを求めようとすれば、上の世代より新しい現象に目を向けたほうがよく学べるようになった。評価も「資格」を基準にするようになり、柔軟で多様な可能性を見いだすことが少なくなり、非常に息苦しくなってきた。

関野：急激に進む IT 化やグローバル化によって、せっかく築き上げてきたはずの「人間らしさ」が失われようとしている。家族やコミュニティの崩壊、伝統技術や知恵の消失、極端な個人主義、奪われる平等、調停のきかない紛争など。こうした傾向を指して、山極さんは『「サル化」する人間社会』（集英社）という形容で警鐘を鳴らした。私も同じ思いをもっている。一方で、ポジティブに人間を捉えている。遠い祖先から受け継いだ技術を改良し、歴史から学び、目標をもって未来を展望しようと思えることができるのも人間だから。

c. 取材対象 ロケ取材など

取材対象：テーマに詳しいゲストとの対話 ロケ取材：無

d. 出演者など（※キャリアアップ支援認証制度を希望する場合は、担当講師及び客員教員発令の有無も記載）

山極壽一（京都大前総長、日本学術会議前会長、4月1日より総合地球環境学研究所所長）

関野吉晴（武蔵野美術大学名誉教授、医師・探検家）

7) 主体性の確保

放送大学教員の稲村が聞き手となると共に、総合科目「レジリエンスの諸相：人類史的視点からの挑戦（'18）」のコンセプトに基づき、文化人類学の立場から発言し、議論する。

8) 制作予定期間

契約締結日～令和3年12月28日

9) 演出上の特記事項

パターンが何枚か必要になる可能性がある。

10) スポット制作希望(原則有り)

有

11) 字幕制作希望

有

ゲストのプロフィール

・山極壽一

1952年東京生まれ。京都大学大学院理学研究科修了、理学博士。日本モンキーセンター・リサーチフェロー、京都大学教授、京都大学総長、日本学術会議会長等を経て、現在京都大学名誉教授。2021年4月より総合地球環境学研究所所長。1978年以来、アフリカ各地でのゴリラの野外研究を通じて、初期人類の生活や人類に特有な社会特徴の由来を探ってきた。主著：『ゴリラ』、『家族進化論』、『人類進化論—霊長類学からの展開』、『暴力はどこからきたか』、『「サル化」する人間社会』など。

・関野吉晴

1949年東京生まれ。一橋大学法学部、社会学部卒業、横浜市立大学医学部卒業。医師・探検家。現在は武蔵野美大名誉教授。一橋大学在学中に探検部を創設し、以後20年間、南米各地を探検。1993年から人類拡散の最長ルートを逆にたどって、南米南端からアフリカまで約10年の旅「グレートジャーニー」を完遂。その後も、日本列島への人類の移動ルートを追って、シベリアやヒマラヤからの陸路の旅と、インドネシアから沖縄までの手作りカヌーの航海などを行う。主著：『我々はどこから来たのか—グレートジャーニー全記録』、『人類滅亡を避ける道—関野吉晴対談集』など。

※出演者は現時点の予定であり、変更の可能性がある。
出演予定者に内容等問い合わせを行うことは厳禁とする。

別紙 3

2021年3月29日

生涯学習支援番組企画提案書

担当プロデューサー、ディレクター
原 哲三プロデューサー

1) 番組名(グループ名) スペシャル講演	2) 個別番組タイトル スペシャル講演
3) 関係の深いコース	
4) 放送回数、期間、マルチ展開など 2年20回	5) 番組尺、本数 45分 × 4本
6) 内容等	
a. 目的・ねらい 放送大学が誇る講師陣によるスペシャル講演。退職される先生を中心に、シリーズとして制作・放送し、ベテラン教授陣により各分野の興味深い内容が聞けるシリーズとして好評を博している。今年度も退職される先生方を中心にアカデミックでかつ内容の濃い講演の様子を伝えたい。今回は、2021年3月に退職した学習センター所長4名が登場する。	
b. 内容・構成	
■「イノベーションと知識経営」 平田 透教授(前石川学習センター所長) 社会の進歩や企業の競争力向上に不可欠なイノベーション。技術革新という日本語があてはめられているが、それを担うのは人であり、人の間で新たな知識がどのように創造されていくのかが重要になる。1990年代の半ばに、日本企業の研究開発プロセスの分析から、人を中心とする経営学の考え方として「知識創造モデル(SECIモデル)」が提唱された。講演では、イノベーションの基盤である人の知識に視点をあて、「組織的知識創造」いわゆる「ナレッジ・マネジメント」について、そのキーワードである「暗黙知」と「形式知」、「場」を中心に「知識創造理論」の考え方を解説する。	
■「正義と公正の心理学」 大淵 憲一教授(前宮城学習センター所長) 正義(公正)は哲学者たちによって普遍的道德原理として論じられてきた。政治家や法律家も「正義はひとつ」であると信じ、法制度や社会システムの構築を通して正義の実現を目指している。しかし、どんな法律や社会制度も一般市民の価値観と合致し、支えられことなしには十分に機能できない。さらに、近年は企業活動も公正の観点から評価されることが増えてきた。それ故、一般の人々が何を公正と信じ、何を不公正とみなすかを理解することは、現代の社会的諸問題の解決を図るうえで不可欠の視点である。これに取り組むのが正義・公正の心理学である。本講義では、一般市民の公正観に焦点を当て、公正・不公正が彼らの感情や行動にどのような影響を与えるかを、実験や調査などの実証的手法を用いて解明していく。	
■「これからの日本農業を考えるー農業経営研究の視点からー」 小林 一教授(前鳥取学習センター所長) 農業は私たち人間の生存と社会の安定にとって欠かせない存在である。今日では、食料供給のみならず環境保全や生活保全等に係る多面的機能の側面からも重要性が指摘されている。農業経営は、農業の生産活	

動を担う単位であり、農業発展にとって農業経営の発展が基盤となる。この講義では、日本の農業経営が直面する課題を整理し、農業経営研究の成果に基づきこれからの展開方向について考察することにより、日本農業に対する関心を高めてもらう

■「マルクス理論の背後仮説と社会学的人間論の領野」 藤井 史朗教授（前静岡学習センター所長）

近時、西欧や日本において、特にマルクス晩年期の研究ノートの検討などを介し、地球環境や生態系破壊問題の解決論理としてのマルクス思想が再評価されている。確かにマルクス理論の「背後仮説」として固有の自然哲学があることは以前より知られているが、それは自然的人間を前提とするルソーの「一般意志」の構造にも類似し、現実の個々人を肯定的に理解する方法にはなり得ない。では人間認識の領野はいかにあるべきか。藤井教授自身のマルクス理論経験の内的な批判的吟味を介して、現実の個々人を肯定的に理解する理論的方向性を、「社会学的人間論」の構想として模索している経緯を示していく。

講演収録について

日程と収録場所が決まり次第、大学学園内の周知を早めに行うとともに、学習センター支援室の協力を受けつつ、教職員や学生の公募スタイルですすめたい。

c. 取材対象		ロケ取材		有（現地での収録）	など
d. 出演者など		上記の講師 4名			
7) 主体性の確保 (元) 放送大学教授・所長が行う講演を放送大学として番組にするものであり、主体性は確保されている。					
8) 制作予定期間		契約締結日～ 令和4年2月28日			
9) 演出上の特記事項					
10) スポット制作希望(原則有り)		有		11) 字幕制作希望 無	